

7-1-2024

Influences on the View of Nature in Modern Japanese Literature Kawabata Yasunari, Kunikida Doppo and others as examples

Maha Saafan

Department of Japanese Language, Faculty of Al-Alsun, Ain Shams University,
mahaahmedhussein@alsun.asu.edu.eg

Follow this and additional works at: <https://jfa.cu.edu.eg/journal>



Part of the [Japanese Studies Commons](#)

Recommended Citation

Saafan, Maha (2024) "Influences on the View of Nature in Modern Japanese Literature Kawabata Yasunari, Kunikida Doppo and others as examples," *Journal of the Faculty of Arts (JFA)*: Vol. 84: Iss. 3, Article 19.

This Original Study is brought to you for free and open access by Journal of the Faculty of Arts (JFA). It has been accepted for inclusion in Journal of the Faculty of Arts (JFA) by an authorized editor of Journal of the Faculty of Arts (JFA).

近代日本文学における自然観が受けた影響
—川端康成、国木田独歩などを例として—(*)

Maha Ahmed Hussein

Japanese Department, Faculty of Al Alsun,
Ain Shams University

Abstract

The relationship between the people of Japan and nature started at with the dawn of time, taking influences from authentic Japanese beliefs starting from Shintoism which believed in the divinity of nature and all its elements or what is recognized as animism; however, with time, the Japanese society in all began to develop and take on western influences in both ideology and religious belief as well as literary expression. Japanese authors, much like the rest of society, took in these influences whether political, ideological, or literary. Furthermore, each author reflected their own individual influences into their depiction of nature. Western influences meant for the most part a modern approach, while traditional influences meant, for some, a fight for authentic Japanese views. The author has decided to take up Kunikida Doppo as an example of the earlier and Kawabata Yasunari as an example of the latter as well as other influential writers of the modern era.

Keywords: Nature, Romanticism, Proletarians, Japan the Beautiful and Myself

الملخص العربي

نشأت العلاقة بين الشعب الياباني والطبيعة منذ قديم الأزل، وأثرت فيها العديد من العوامل الفكرية والثقافية، إذ ارتبطت رؤية اليابانيين الأصيلة للطبيعة بالعقيدة الشنتوية التي تؤمن بوجود روح في كل نظم الطبيعة، فحلت حينئذ محل التقديس. وبدخول معتقدات جديدة من الصين مثل البوذية والكنفوشية والطاوية تطورت رؤية اليابانيين، وبحلول منتصف القرن السادس تطورت رؤية العالم إلى الرؤية الكونية والتي تعتقد في وجود سبب أول لعناصر الطبيعة فيما يختلف عن الرؤية الإحيائية للشنتوية، ومع انفتاح اليابان على العالم في عصر مييجي وبداية حركة التبشير، أصبحت الطبيعة في سياق الرؤية المسيحية هبة الخالق للإنسان.

أما الأدباء اليابانيون فتأثروا بدورهم بتلك العوامل العقائدية وكذلك بعوامل فكرية، وسياسية وأدبية عديدة. هذا علاوة على التأثيرات الفريدة على كل كاتب وأعماله وبصفة عامة فإن تناول الأدباء في تلك الفترة للطبيعة تأثر بتوجهاتهم، فمن تأثر بالغرب رأي العالم بعبونه وسعى للتجديد، وفي مقابل ذلك من تأثر بالقوموية والتمسك بالنزعة القومية سعى إلى استعادة الثقافة اليابانية الأصيلة ورؤيتها التقليدية للطبيعة. يحاول هذا البحث تناول كاتبين أحدهما تمسك بالرؤية التقليدية للطبيعة وهو كاواباتا ياسوناري، والآخر تأثر بالمنظور الغربية فكريا واعتقاديا وهو كونيكيذا دوبو.

الكلمات المفتاحية: الطبيعة، المدرسة الرومانسية، البروليتاريا، اليابان الجميلة وأنا

1. 「美しい日本の私」に見られる、日本固有の自然観

日本固有の自然観が、日本書紀や古事記などにどのように見られるかについて、濱井ら（2014）は、日本国土の形成という点から次のように明らかにしている。イザナギ・イザナミは男女の二神であり、日本列島を形成する島々や、火・山・風・川などの自然を司る神々はこの二神の間に生まれたと語られている。そして、二神が皇祖天照大神も生んだとされる⁽¹⁾。そのため、日本人は自分の領土である島々とその自然だけでなく、天皇も神聖視していた。

1968年、川端康成（1899-1972）はストックホルムで初の日本人ノーベル文学賞受賞作家として、次の二つの和歌で講演をはじめた。

春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷しかりけり
雲を出でて 我にとむなふ 冬の月 風や身にしむ 雪や
冷たき⁽²⁾

講演の際、川端は日本の文化を海外に紹介する機会と捉え、自分の文学活動に影響を与えた要素を明らかにしたいという理由で、「美しい日本の私」という講演をおこなった。川端はこの二つの和歌を起点にして、講演内で日本的な美感や自然との関係を特に強調した。

「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえて 冷しかりけり」の歌は、鎌倉時代の禅僧・道元によるものであり、四季節の特徴を描き並べた単なる言葉の羅列に見えるが、実に日本人の真髓を伝える歌であると川端は述べている。続いて川端は、江戸時代の良寛の歌を分析する。良寛は詩歌の中で「自分の死後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるであろう」と述べている。仏教の禅宗の話の後、華道や茶道、庭や石庭などにふれ、その非対称が自然の広大さを表していると、日本的な「美」を説明した。

続いて「雲を出でて」で始まる二つ目の和歌を取り上げる。これは鎌倉時代の僧である明恵が瞑想の際に詠んだ歌であり、「しみじみとやさしい日本人の心の歌」とあるという理由でこの歌を選んだと川端は述べている。また、四季節、その移り変わりが日本人の美感やその仲間関係とかかわりがあると言う。矢代幸雄の「雪月花の時、最も友を思ふ。」にその概念がさらに深く見られる。自然の美しさで人が感動し、一人だけでなく、「友」もしくはさらに広く「人間」と共有したくなる。川端

はこのようなことが伝統的な茶道に見られるではないかとしている。

続いて、川端は「自然の、正しく、美しい姿や動きは、舞踊の訓練によってでなければ、最早人間には現わすことができない。」「人間ほど醜いものはないと、憂鬱にとざされることがしばしばである。ただ舞踊が、辛うじてその醜さを救っていると云えようか。」（「わが舞姫の記」1933年）⁽³⁾ これらから川端が自然の美しさを伝統的な日本芸術を通して認識していることがわかる。

そして、三つ目として、もう一つの明恵の詩を川端は取り上げている。

「山の端に傾ぶくを見おきて、峰の禅堂にいたる時
山の端にわれも入りなむ月も入れ夜な夜なごとにまた友とせむ」

「隈もなく澄める心の輝けば我が光りとや月思ふらむ」

「あかあかやあかあかあかやあかあかやあかあかあかやあかあかや月」⁴

これらについて、川端は明恵の詩は西行の月の取り上げ方と似ていると述べている。冬の月を描写する明恵と一致するのである。自分は月になり、自分に見られる月が自分になる。それで、自然に没入し、自然と一体化する明恵と自然との関係をどのように親しんでいるか述べている。自然との一体感が強いほど、その光は詩者（明恵）の心に反映しているという。暁前の暗い禅堂に座って思素する僧の「澄める心」の光を、有明の月は月自身の光だと思うであろう。

そして、「雲を出でて 我にとむなふ 冬の月 風や身にしむ雪や冷たき」をどうしていつも揮毫するかについて触れ、まことに心優しく、思いやりの歌とも受け取れるからであるとしている。雪と冬の風の冷たさもあり、雲に入り、雲から出る冬の月は歌人の足もとを明るくし、狼の吼え声を恐れなくする。このような自然への見方は「自然・そして人間にたいする、あたたかく、深い、細やかな思いやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌」だと川端は述べている。さらに、その「日本人の心」あるいは「日本人の美術」の特有の一つとして、白楽天の「雪月花の詩、最も友を思ふ」という詩を選んでいる。

雪・月・花の美しさ、あるいは四季節の美を見ると、幸せな気持ちになる。その時、最も親しい「友」と一緒にその喜びを共通して持とうとする。川端は「友」を広く「人間」ととらえ、「雪・月・花」は四季節の移り変わりを表しているのだという。日本において山川草木、森羅万象、自然のすべてと人間の感情が深くつながっていることは日本の伝統の一部なのである。

霞立つ 永き春日を 子供らと 手毬つきつつ この日暮
らしつ
風は清し 月はさやけし いざ共に 踊り明かさむ 老い
の名残りに
世の中に まじらぬとには あらねども ひとり遊びぞ
我れはまされる

これらの詩は良寛の詩である。良寛は草の庵に住み、野道を歩き、子供と遊び、信教と文学を深く結び、「和顔愛語」という無垢な言行を信じた。その詩の最後に自分は形見に残せるものはなにも持たぬし、なにも残したいとは思わず、自分の死後も自然はそのまま美しく残るという望みを表している。このような感情は日本の古来の心情がこもっているとともに、良寛の宗教の心も聞こえる歌であると川端が述べている。

以上の事柄をふまえて、川端は日本自然の美しさを正しく評価できるよう、まず近代化や現代化から完全に離れ、日本固有の文化・文学・宗教のレンズを通してみななければならないとする。それにより、人間と自然の関係は無垢以外なのにもものでもなく、その美しさを味わうことだけが人間にとっての利益となるとしている。

次の一休の詩について、川端は東洋画の精神、その空間、餘白、省筆も「墨絵」の心だとする。

問へば言ふ 問はねば言はぬ 達磨どの 心の内に なにかあるべき
心とは いかなるものを 言ふならん 墨絵に書きし 松風の音

生け花（華道）と日本の庭の芸術などは大きい自然の象徴であると川端は考えている。池坊専應は「ただ小水尺樹をもって、江山数程のおもむきを現はし…のあひだに、千変方化の佳興をもよほす。あたかも仙家の妙術と言ひつべし。」と述べている。自然の大きさや広さ、その多くのものを表すために、日本

の庭は西洋の庭と違って不均整に造られている。また、枯山水には石や岩を組み合わせる方法により、そこにはない山、川、岩壁に打ち寄せる大海の波も示す。日本風の造園法に見られる不均整はでたらめではなく、複雑、多種、綿密も表す。

日本伝統を重んじる川端の感情が第二次世界大戦の敗戦後に非常に強くなった。「敗戦後の私は日本古来の苦しみ井の中に帰ってゆくばかりである。私は戦後の世相なるもの、風俗なるものを信じない。現実なるものもあるいは信じない。」⁽⁵⁾と川端は述べている。このような考え方が「土曜夫人」や「源氏物語」における悲しみやあわれと当たっているであろう⁽⁶⁾。「美しい日本の私」にみられる川端康成の成長した自然観は川端自身の作家の発展、日本国内の政治的な変化、あるいは、敗戦、占領などを総合した上で確立したのであろう。川端のノーベル賞受賞は世界中に日本文学を広めることになった。

川端が「美しい日本の私」の中で紹介した日本の美観、美意識、自然観「雪月花」、伝統的な華道・茶道・能などは他の機会を通じ、再び異文化、特に西欧に紹介しようとした。「思い出すともなく」、「ほろびぬ美」、「美の存在と発見」、「日本文学の美」、「日本美の展開」⁽⁷⁾などの講演がその例である。おそらく、川端に政治より更に意味のある目標があったものと思われる。

2. 宮沢賢治が抱いた法華経とその影響

宮沢賢治（1896-1933）もまた、独特な自然観を示している宮沢の場合は、根本思想である仏教（法華経）に基づいた自然観、彼の職業専門領域に基づいた自然観、花巻に長く暮らしていた柳田国男の『遠野物語』に伝承されている民俗的自然観な

どが互いに混ざり合って、複雑な自然観が生み出されているのである。

時計屋の店には明るくネオン燈がついて、一秒ごとに石でこさえたふくろうの赤い眼が、くるっくるっとうごいたり、いろいろな宝石が海のような色をした厚い硝子の盤に載って、星のようにゆっくり循環ったり、また向こう側から、銅の人馬がゆっくりこっちへまわって来たりするのであった。その中に円い黒い星座早見が青いアスパラガスの葉で飾ってあった。

大久保喬樹（1996）が「それはひる学校で見たあの図よりはずうっと小さかったのですが、その日と時間を合せて盤をまはすと、そのとき出てゐるそらがそのまま楕円形のなかにめぐってあらはれるやうになって居り、やはりその中には上から下へかけて銀河がぼうとけむったやうな帯になって、その下の方ではかすかに爆発して湯気でもあげてゐるやうに見えるのでした。またそのうしろには三本の脚のついた小さな望遠鏡が黄いろに光って立ってゐましたし、いちばんうしろの壁には空ちゅうの星座をふしぎな獣や蛇や魚や瓶の形に書いた大きな図がかかってゐました」と述べる。⁽⁸⁾

ここで天上世界（自然界）と地上世界（人間界）は、いずれも、他方からみれば天の川の水の中にある司として、高次の次元から眺める時、両世界の差は相対化され、同レベルの相同的な空間と規定される。この両空間の相同性の暗示は、その後、〈四、ケンタウル祭の夜〉の町の時計屋のウィンドーに飾られた星座模型の描写、その直後の夜の町の描写等に繰り返し見られる。

続いて、〈五、天気輪の柱〉では、両空間は銀河鉄道によって結ばれる連続同一空間と化して、そこに主人公ショパンニは入っていくのである。この銀河空間には様々な特性があるが、ひとつは、砂かと思うと水晶であったり、水かと思うと光であったり、この空間を構成している種々の物質や生物が変幻自在の相対的、交換的なものであることであり、また種々の時空間が並列的、重層的に共存していることでもある。こうした特性は、いずれも『春と修羅』序詩の四次元相対時空間相を具現したものに他ならないが、そこでの自然は、人間を含めた万物と相互に入れ換わり、ひとつになる。そして、それ自身のうちに仏性(命)を有したアニミズム的存在として現れるのである。

3. 国木田独歩が西洋から受けた影響

Tucker (2003) によれば、江戸時代の鎖国が終わった後、明治時代に入り、日本の国際関係が強化されるにつれ、西洋からの影響が色濃くなり始めた。キリスト教に基づいた自然観も日本へ輸出され、日本の伝統的なものと混ざるようになった。三枝博音という哲学者は「自然」が「自ずから然るもの」⁽⁹⁾であるのに対し、人間はその反対のものであるとして、日本における自然と人間の関係を明らかにしている。

明治時代の文明開化と同時に、西洋の模倣を通じキリスト教が広がり、当時の作家らにも影響を与えた。影響を受けた例が、内村鑑三、北村透谷、国木田独歩などである。しかしながら、明治期と大正期にキリスト教を信仰した作家の中には西洋の思想と東洋の日本的な考えの間で迷い、キリスト教に不信感を抱

くようになった。それにより、西洋文明とキリスト教を区別して考えるようになった者もいる。

もう一つの西洋の影響として、フランスの自然主義が挙げられる。近代日本文学に大きく影響を及ぼした文学派の一つである。とはいえ、フランス自然主義と違い、日本の自然主義文学は作家自身の人生とその出来事に焦点があてられており、やがて「私小説」を生み出すことになるのである。日本固有の自然観は日常生活と関係があるため、このようなジャンルで人間と自然の関係をアニミズムの視点から明らかにすることが可能であろう。また、政治的な影響もあり、敗戦後西洋の影響から完全に離れ、日本の伝統的な文化を取り戻すという視点を持った作家がいた。では、明治30年代頃から昭和40年代頃にかけて日本文学における自然観がどのように影響を受け、どのように発展していったかを見ていく。

まず、明治時代を代表する自然に対して深い関心をもった国木田独歩の文学を見ることにより、どのような影響を受けたかを探る。国木田文学に影響を与えたのは英文詩人のワーズワースとロシア人小説家のツルゲーネフである。『欺かざるの記』で国木田（1996年）は「自分が最も熱心にワーズワースを読んだのは豊後の佐伯に居た時分である。自分は田舎教師として此所に一年間滞在して居た。

自分は今ワイ河畔の詩を読んで、端なく思ひ起こすは実に此一年間の生活及び佐伯の風光である。彼地に於いて自分は教師といふよりも寧ろ生徒であつた。ワーズワースの詩想に導かれて自然を学ぶ処の生徒であつた。成程七年は経過した、然し自分の眼底には彼地の山岳、河流、溪谷、緑野、森林悉く鮮明に

残つて居て、我故郷の風物よりも幾倍の色彩を放つて居る。何故だろう？」と述べている⁽¹⁰⁾。

また、『小春』などにワーズワースの詩を一語一語英語で引用している。

Therefore, let the moon
Shine on thee in thy solitary walk
And let the misty mountain winds
Be free to blow against thee⁽¹¹⁾

国木田の最も有名な『武蔵野』（1939年）の中で、ワーズワースに加え、ツルゲーネフの風景描写が何回も引用されているが、の和訳を使用している。そして、田淵（2008）によって、クラシックな文学における日本美意識を表す伝統的な自然描写と離れ、独自の境地を示し、ごくありきたりの武蔵野の風景のなかに詩趣を見だし、自然の中で安堵するという変動・変革期を経過した明治中期の日本社会の在り様も写しだしている。

『武蔵野』の成立における独歩の意図と背景を本項で探る。⁽¹²⁾

武蔵野にはけっして禿山はない。しかし大洋のうねりのように高低起伏している。それも外見には一面の平原のようで、むしろ高台のところどころが低く窪くぼんで小さな浅い谷をなしているといったほうが適当であろう。この谷の底はたいがい水田である。畑はおもに高台にある、高台は林と畑とでさまざまの区劃をなしている。畑はすなわち野である。されば林とても数里にわたるものなく否いな、おそらく一里にわたるものもあるまい、畑とても一眸いちぼう数里に続くものはなく一座の林

の周囲は畑、一頃「いっけい」の畑の三方は林、というような具合で、農家がある間に散在してさらにこれを分割している。すなわち野やら林やら、ただ乱雑に入組んでいて、たちまち林に入るかと思えば、たちまち野に出るといような風である。それがまたじつに武蔵野に一種の特色を与えていて、ここに自然あり、ここに生活あり、北海道のような自然そのままの大原野大森林とは異なっていて、その趣も特異である。⁽¹³⁾

ここから、国木田文学の特徴が幾つか見られる。情景を思い浮かべられるほど詳しく自然の変化を描くこと、その変化は内部の感情の変化を反映していること、見える風景を完全に描くことなどが挙げられる。しかしこのような特徴があるにもかかわらず、k 国木田と信子の恋愛感情が強まるなか、自分たち自身が自然に抱かれ、自然が物語の主人公となっているとする。『武蔵野』の第六章で次のように述べている。

“Let us match
This water’s pleasant tune
With some old Border song, or catch,
That suits a summer’s noon”

の句も思ひ出されて、七十二歳の翁と少年とが、そこら桜の木蔭にでも坐つて居ないだろうかと思廻はしたくなる。自分は此流の両側に散点する農家の者を幸福の人々と思つた。無論、此堤の上を麦藁帽子とステッキ一本で散歩する自分達をも。」⁽¹⁴⁾

基本的に、自然を人間の外にある、人間と対立する他者としてとらえようとする方向に進みながら、同時に、自然を自己の内面の延長線上にとらえ、眺めようとする心性に強く縛られて

いるという矛盾葛藤を本質とした作品といえる。そして『武蔵野』の後半部にあらわれる町外れとは、まさに、こうした自然位置する矛盾葛藤が生々しく露呈する療養的な場に他にならないのである。

国木田文学における自然描写の技術の一つとして風景画との対比を意識していたことは、例えば、『小春』に次のスケッチを使用する。

同じ自然の崇拜者である、彼は画に由て、自分は詩に導かれて、自分の語る処は彼に能く了解る。彼の問ふ処は自分の言はんと欲する処。

「先づ其な安排でただもう夢中であつた。併し君と異ふのは、君は観ると真ぐ画きたくなる僕はただ感ずるばかりだ。それで君は時とすると自然の美の余りに複雑して現はれて居なるのに圧倒せられて了ふ、僕には其んなことはない、君は自然を捉へようと試みる、僕は観て感じ得るだけを感じずる、だいふ僕の方が楽だ。時によると僕も日記中に君の見取図くらゐな処を書きとめたこともあるが、それは真の組雑とした者だ。」

「そのスケッチが見たう御座いますね、」と小山の求めるままに十一月三日の記から読みだした。

「野を散歩す、日麗曖かにして、小春の季節なり。櫨紅葉は半ば散りて半ば枝に残りたる、風吹くごとに閃めき飛ぶ。海近き河口に至る。湖退て洲あらはれ鳥の群、飛び廻る。水門を下ろす童子あり。灘村に舟を渡さんと舷に腰かけて湖の来るを持つらん若者あり。背低き櫨堤の上に樹ちて浜風に吹かれ、紅の葉毎に光を放つ。野末查に百舌鳥のあはただしく鳴が聞ゆ。純

白の裏羽を日にかがやかし鋭く羽風を切つて飛ぶは魚鷹なり。

」⁽¹⁵⁾

国木田と同時期に活躍していた徳富蘆花は自然詩人としての名声が高まった「自然と人生」という随筆・小品集を1900年に発表した。徳富も西洋文学、特にトルストイに影響された。「自然と人生」には短篇小説、評伝、随筆、散文詩も含まれている。その中に汎神論的な自然観がうかがえる。つまり、神と万物とは同体であり、万物の中に神が存在するという意味である。このことは「自然と人生」および『武蔵野』双方に共通して見られ、戦前の作家がどのように自然を描写し、表現したかを理解するために重要な作品であると言えるであろう。

ロマン主義とフランス革命によって絶対主義体制もそのころの文学作家に影響を与えた。明治9年に創立された札幌農学校の初代教頭クラークは内村鑑三、新渡戸稻造、あるいは有島武郎のような人材を輩出して日本のキリスト教史上、大きな役割を果たした。同時に、近代日本自然意識の発展上、札幌学校は一つの拠点となっている。それは、北海道の手つかずの自然を前にし、そこに、世俗を超えた純潔な自然というキリスト教理想主義的自然観を投影して讃えたことであり、国木田の北海道行きを促したのも、そうした自然観の他にならないといえるであろう。⁽¹⁶⁾

『日本風景論』を書いた志賀重昂は内村と新渡戸より三年下にあたる札幌農学校出身者である。卒業当時、イギリス等西欧列強が進出を企てていた南洋情勢に関心を持っていたため視察に赴き、その結果、日本の南洋進出、海外への植民の必要を世論に訴え、三宅雪嶺と政教社を創立した。右派の代表的な論客

の一人である。国威発揚を目的として「日本風景論」には政治的な立場に基づいて書いたと言える。それにもかかわらず、志賀の日本風景—自然評価は実証的、科学的、総合的に日本の風土特質の多様性を観察している点で際立っている。

一般的に、明治20年代後半から30年代前半の時期、実学—自然科学の発想の流れも、キリスト教的世界観が影響した理想主義的自然観などの近代的自然意識のあつたく国木田などの作家に影響した。

明治33年（1900年）に創刊された詩歌雑誌『明星』は明治30年代当時の若い世代の文学青年、芸術青年に広く影響を与え、日本におけるロマン主義的思潮の普及、一般化に貢献し、明治20年代に拠り所としていたロマン主義の方向性を大きく変えた。国木田独歩らに代表される明治30年前後までのロマン主義はバイロン、エマーソン、ワーズワース、ハイネなど西欧ロマン主義初期から中期までの理想主義的、精神主義的傾向を反映している。それに対し、『明星』がその芸術観の多くを拠ったのは、ロマン主義中期から後期の段階に位置するラファエル前派運動である。

そのため、明治20年代までのロマン主義から離れ、明治40年代に顕在化する世紀末芸術傾向に通じる流れを開いたといえるのである。そして、明治末期から大正前中期にかけての日本文学にあらわれた自然像は、多様なスタイルをもちながら、おしなべて収縮微小化の傾向をたどったといえる。日露戦争後急速に都市文明化した日本社会を背景に、一挙に顕在化した傾向を基本的に継承、深化したものといえる。

明治20年代から30年代にかけて、初期ロマン派の自然理想の影響下において、透谷から国木田へと発展した野生大自然への憧憬は日本人の自然意識史上画期的なものだったが、結局、それは一時的な少数レベルにとどまる。その後、再び反動のように、こうした収縮微小化の方向に日本文学の自然意識は向かうのである。

大久保喬樹（1996）によって、その江戸の町人文化における盆栽的自然意識—共同的な型にはめこまれ、文化のみに組み込まれた自然意識—とは、そうした共同的な型をれようとして個人的、主観的なスタイルを追求し（非自然主義系）、あるいは、観察写生を基本とする（私小説、心境小説系）という点で対照的（近世古典主義的文化対近代ロマン主義的あるいはリアリズム的文化）ながら、社会の壁の中に閉じこめられた小自然という点では一致する。こうした自然は日本人の自然意識の基本となるものだったが、明治末期から大正前中期にかけての日本文学における自然意識は、その近代的な姿を示すものであろう⁽¹⁷⁾。

4. 関東大震災以降ライバルした文学派

大正12年（1923年）に起こった関東大震災は、単に物理的にそれまでの街並みを破壊したばかりでなく、より根本的に都市文明の性格そのものを一変させた。震災の翌年に『文芸時代』と『文芸戦線』が創刊され、新感覚派とプロレタリア文学派が登場し、新文学傾向が広がりはじめた。同時に、日本社会や日本人の生活も変わりつつあった。ラジオ、映画、自動車、電気、電話などが社会全体、市民生活全般にまで及んだのがこの時

期であり、当時の文学作家の作品はその変化を反映しているのである。

そして、大久保喬樹（1996）が人間の自然に対する感覚も大きく変容したとする。これまでの近代文学における自然に種々のニュアンスの差はあれ、基本的に人間に対して受け身な、人間の意識、行動の対象として現れてきたのに対し、横光作品における自然は、人間から独立してそれ自体の能動的意志をもつものとして現れることが挙げられる。横光利一の『静かなる羅列』には星雲、河川という自然の系列と、階級対立抗争を続ける人間社会の系列が、それぞれ独立した集団として鳥瞰的な視点で平行的に眺められる。それに対し、『ナポレオンと田虫』で、田虫という小さく単純な生物がナポレオンという偉大な人を翻弄している。この作品からは人類史全体を動かすという自然の人間に対する優位が見られる。⁽¹⁸⁾

同時に活発であったプロレタリア文学における自然の扱いは、横光の場合のように意識的、戦略的に押し出されるのとは違って、それほど際立った意識もなく、ただ背景的なものとして簡単、無雑作に描かれている場合が多い。とはいえ、新感覚派とプロレタリア文学はイデオロギー的に対立しながらも同じ時代の現代的な文明状況を反映している点で共通している。

その後、満州事変（昭和6年、1931年）などにより、軍国主義化、ナショナリズム化、保守化などが登場し、社会が変化し始めた。昭和10年前後から日本の文学と文化は反動的に日本回帰傾向を急速に強めた。その頃に川端康成は代表的な『雪国』を書き始めたのである。

三好ら（1994）によって、昭和12年に志賀直哉は唯一の長編小説『暗夜行路』を書いている。主人公の時任謙作は志賀自身なのである。そのあらすじはこうである。謙作が祖父と母の不義の子として生まれたことを知り苦しむ。ようやく、回復し結婚するが、妻直子が従兄と過ちを犯したことで再び苦悩を背負い、鳥取の大山に一人こもる。大自然の中で精神が清められてすべてを許す心境に達し、「暗夜行路」に終止符を打つ。⁽¹⁹⁾

この中で、西村ら（1976）が「船は島と島との間を縫って進んだと述べる。島々の傾斜地に作られた麦畑が、一ト熔毎に濃い緑淡い緑と、はっきりくぎりをつけて、曇った空の下にビロードのやうに滑らかに美しく眺められた。国置去り日を背にした方が殊に輪郭がくっきりとよく見えた。彼は市の瓢箪屋で、見下部れ瓢の割れ自の線を想ひ出した。自然の作る線、これには矢張り共通な力強さ、美しさがある事に感服した。」と志賀が書く。たとえ謙作の精神的な状態が弱くても、自然の強さと美しさに感服し、なおその力を信じ切り、身を任せるまでには至らぬ。⁽²⁰⁾

まとめ

近代文学における自然観は伝統的な思想と表現方法を基本とし、それに加えて多方面（社会的、経済的、思想的、政治的など）から影響を受けたと結論付けることが可能であろう。社会一般的な変化には、電気製品の普及や、現代的な文明の広がりに加え、政治経済の変化もあり、満州事変、日露戦争、ナショナリズムと軍国主義、第二次世界大戦敗戦なども例として挙げられる。そして、思想の場合にはキリスト教の広がりをはじめ、西欧からのロマン主義、理想主義などが近代文学作家に影響を与えた。

また、作家の個人的な人生も当然その自然観に影響を与えている。宮沢賢治には法華経の影響があり、国木田独歩の失恋の結果として恋愛感情と自然を結び付けていることや、ワーズワースやツルゲーネフの影響などの例もある。日本近代文学における自然観には様々なパターンや取り組み方法があったと言えるが、一般的には明治の文明開化後、西欧のアピールとその文明から学ぶ傾向が強かったため、その当時の文学にあらわれる自然観が西欧の影響を大いに受けた作家がいた一方で、ナショナリズムの方向とともに日本の伝統的な文化のアニミズム化などに再び回帰した作家もいたと見られる。

お二人の作者の作品を見れば、生きるために不可欠な要素としての自然に対する見方は違い、共通の価値観を共有していたことは明らかである。退廃的な文化から解き放たれ、人間の基本的な本性に立ち返った両者は、心の回復を目指した。

参考文献

1. 高橋佳子「川端康成の舞踊観」日本女子体育大学、2015年
2. 濱井修・小寺聡『倫理用語集』山川出版社、2014年
3. Robert Anthony Siegel, The Breeze in the Ink Painting: A Look2 Essay on Kawabata Yasunari, Issue 121, Fall 2013
4. 田淵幸親「『武蔵野』の意図と背景」、『長崎国際大学論叢』第8巻、2008年
5. マハカン・ナンチャヤー「川端康成研究-色彩感覚「赤と白」が象徴しているものごと-」、修士論文、神戸大学、2003年
6. 大久保喬樹『森羅変容-近代日本文学と自然』小沢書店、1996年
7. 三好行雄・竹盛天雄・吉田瀬生・浅井清「近現代文学辞典」明治書院、1994年
8. 西村真一・深沢恒男・鶴木奎治郎「志賀直哉の文学における自然 : 『暗夜行路』と『城の崎にて』を通じて」信州大学教養部紀要第一部, 人文科学 10: (1)-(16)、1976年
9. 川端康成「美しい日本の私-その序論」1969年
https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1968/kawabata-lecture-j.html
10. 「日本文学全集12 国木田独歩 石川啄木集」集英社
1967 (昭和42) 年9月7日初版
1972 (昭和47) 年9月10日9版
11. 国木田独歩『武蔵野』岩波文庫、1939年

Notes

-
- 1- 濱井修・小寺聡『倫理用語集』山川出版社、2014年
 - 2- 川端康成「美しい日本の私—その序説」1969年
https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1968/kawabata-lecture-j.html（閲覧日：2023年11月22日）
 - 3- 高橋佳子「川端康成の舞踊観」日本女子体育大学、2015年、p.37
 - 4- 川端康成「美しい日本の私—その序説」1969年
https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1968/kawabata-lecture-j.html（閲覧日：2023年11月22日）
 - 5- 川端康成「美しい日本の私—その序論」1969年
https://www.nobelprize.org/nobel_prizes/literature/laureates/1968/kawabata-lecture-j.html（閲覧日：2023年11月24日）
 - 6- Robert Anthony Siegel, *The Breeze in the Ink Painting: A Look2 Essay on Kawabata Yasunari*, Issue 121, Fall 2013 p.79
 - 7- マハカン・ナンチャヤー「川端康成研究—色彩感覚「赤と白」が象徴しているものごと—」、修士論文、神戸大学、2003年
 - 8- 大久保喬樹『森羅変容—近代日本文学と自然』小沢書店、1996年、p.220
 - 9- 同上
 - 10- 大久保喬樹『森羅変容—近代日本文学と自然』小沢書店、1996年、pp.33-36

-
- 11- 国木田独歩『武蔵野』岩波文庫、1939年
 - 12- 田淵幸親「『武蔵野』の意図と背景」、『長崎国際大学論叢』第8巻、2008年、pp.35-44
 - 13- 「日本文学全集12 国木田独歩 石川啄木集」集英社 1967（昭和42）年9月7日初版 1972（昭和47）年9月10日9版 「国木田独歩全集」学習研究社 1998年10月21日公開 2004年6月17日修正
 - 14- 大久保喬樹『森羅変容—近代日本文学と自然』小沢書店、1996年、p.36
 - 15- 大久保喬樹『森羅変容—近代日本文学と自然』小沢書店、1996年、p.59
 - 16- 同上、pp.55-60
 - 17- 同上、p.89
 - 18- 同上、pp.156-166
 - 19- 三好行雄・竹盛天雄・吉田瀬生・浅井清「近現代文学辞典」明治書院、1994年
 - 20- 西村真一・深沢恒男・鶴木奎治郎「志賀直哉の文学における自然：『暗夜行路』と『城の崎にて』を通じて」信州大学教養部紀要 第一部、人文科学 10: (1)-(16)、1976年